

疎水逍遙

安藤 紳次

本誌189号に「土佐の絵師、河田小龍と『漂異紀畧』の話」を奥正敬・京都外大図書館事務長が書いている。

文中、最後の数行で絵師・小龍が明治初期の北垣国道・京都府知事から招かれ、当時の歴史の大事業である琵琶湖疎水工事を独特の作風で活写した単行本『琵琶湖疎水圖誌』が紹介されている。

明治の偉大な絵師が京都へ水を送るための疎水工事をどのように描き後世へ残したのか、その足跡の一端に大きな関心をもった。

しかし、この『琵琶湖疎水圖誌』は今から30余年前の昭和53年に限定数が出版されていた復刻版であった。幸運にも外大図書館が所蔵していたので早速見せて頂いた。

この本は270余頁の大型本でかなり重い書物であったが、頁をめくる前から何となくその内容に期待しながら探求心に心を弾ませた。やはり期待に違わず、小龍の描いた絵図は当時の風景や工事現場を大胆に時に繊細に描写し、巨大プロジェクトにふさわしい色彩と絵筆の先端が当時の様子を彷彿とさせていた。

この本に魅了され、疎水が醸す水とロマンに憧れ湖畔をめざすことにした。

休日の早朝、滋賀県大津市の京阪電車の石坂線・三井寺駅を降りると、すぐそばで琵琶湖の水が清流となって疎水を作っていた。

水面は道路より数メートル下にあり、そこに至る斜面には桜の幹が大きく育ち、その季節には賑わいをみせるが、それとて春の2週間程度である。

それ以外の日、つまり年間351日（365日-14日）は観光客も多くなく、その素顔が見られる。

疎水は緩やかな流れにあわせ水面を創ってゆくが、この水はH₂Oの結晶ではない。

そこには先人の知恵と心意気が匂い、水資源を京都へと送る情熱が時にゆるやかにそして急ぎながらも湖の町・大津の風に触れている様子が見えた。

疎水の工期は明治18年6月から23年4月までの約5年間、小龍はそのうち明治22年5月から完成までの様子を400枚程度描いたという。

デジタルカメラの記録なら大きな苦勞もいらぬが、絵筆の作業は想像をこえた仕事であったに違いない。疎水沿いはそんな印象があふれる景観である。

仮に当時デジタルカメラが存在し、それによって記録されていても120余年を経た現代にその映像が再現可能か、今日の技術を以っても明確に答えられない。

フィルム写真の保存可能期限はおよその目処はつくが、デジタルは未知数である。

そんな理屈にフィルムカメラしか所有しない自分を重ね、カメラ片手に琵琶湖の取水口から第一隧道東側入口までの731mを幾度か往復した。

“耳を澄ませば100余年前にこの大事業を完成させたエネルギーが微かな瀬音となって鼓膜を震わせている”と感じるのは私の錯覚か。そしてそこから、もう日本から消えたような“青雲の志”が確かに伝わってきた。

読者の皆様、一度現地へ行って水の流れに自分の人生を投影されてみたらいかがか。

最短・最速・最高と「最」の字と数字に陶醉しながら日々、自分があるいは社会を定義するのも程々にとと思うだろう。

物事が完成する過程は極めて地味であるが、そのことをしっかり見据え、あわせて己の人生は社会を幸せにする一人となる事が究極の目的であることを忘れまい。

それが働くこと、学ぶこと、そして生きることの共通・永遠の課題でもある。

やがて121年目の春を迎える疎水の話題ながら、簡単には水に流せない大きな意味を現地で感じることができれば人生再発見である。

(参考資料 ガイダイビブリオテカ189号、琵琶湖疎水圖誌)

あんど う しんじ (アマチュア写真家)